近畿学校保健学会通信

No.109

平成16年10月1日発行
近畿学校保健学会事務局
〒657-5801 神戸市灘区鶴甲3-11
神戸大学発達科学部石川研究室内
TEL&FAX 078-803-7737
kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp
振替口座 00940-5-181826

目　　次

第51回近畿学校保健学会（平成16年度年次学会）報告 ・・・・ 2

1. 第51回近畿学校保健学会を終えて ・・・・ 2
2. 一般講演座長報告 ・・・・ 3
3. 教育講演座長報告 ・・・・ 9
4. 学会長講演座長報告 ・・・・11
5. 学会印象記 ・・・・12

総会報告 ・・・・15

50年間の発表抄録すべてがインターネットを通じて検索可能に ・・・・23

平成16年度第2回近畿学校保健学会議事録 ・・・・24

平成17年度第52回近畿学校保健学会のお知らせ

開催日時　平成17年7月30日（土曜日）
年次学会長　宮西照夫（和歌山大学保健センター）
場所　ダイワロイネット・ホテル（仮称、来年5月オープン）

第51回近畿学校保健学会報告

1. 第51回近畿学校保健学会をおえて

滋賀医科大学　看護学科　　大　矢　紀　昭

第51回近畿学校保健学会をさる平成16年6月5日（土）になんとか無事終了できまして胸をなでおろしています。これも一重にご協力いただきました、近畿学校保健学会の幹事会の先生方、本学会の運営委員会の先生方、ならびにご後援いただきました滋賀県・大津市教育委員会、滋賀県・大津市医師会、滋賀県歯科会ならびに薬剤師会のお陰と深く感謝しています。

学会準備に不慣れな上に、平成16年4月1日より独立法人化という国立大学にとりまして全く未経験な大変革にも襲われまして準備が遅れまして心配していました。多くの不備があり、会員の先生方に多大なご不便をおかけいたしましたが、当日の好天にも恵まれ、記帳された出席者のみでも130名ほどのご参加がありました。

一般演題は30演題で、3会場を使って午前中いっぱいかかりました。私自身B会場で最初から最後まで聞かせてもらいました。肥満を中心にした生活習慣病の演題でしたが、討論も活発で興味深く聞かせてもらいました。成人病という名前から生活習慣病と言われだしてすでに8年が過ぎ、議論も尽くされていたように思っていましたが、まだまだ学童・生徒の間にも多くの不適切な生活習慣の残っていることがよく分かりました。

他会場の抄録をみせていただいても、学校保健の古典的な問題、新しい問題があり、また保健教育、保健管理と領域も広く、養護教諭の先生方のご苦労の一端が理解できた思いがしました。

午後からは2題の教育講演を拝聴しました。

1．学校教育現場の混乱に果たす児童精神医学の役割―――『発達障害』の問題と日米の臨床心理教育の相異を通じて―――

　　京都大学医学部保健学科　　十一元三　教授

2．今日の学校状況と教師に対する相談・支援のあり方―――『教師支援・相談室』の活動に関連して―――

　　滋賀大学教育学部　　窪島　務　教授

十一教授の講演は感動的でした。私自身小児科医ですが、小児精神科の専門医は非常に少なく、小児科学会でも最近のトピックスである発達障害児（境界域や広汎性）の話を分かり易く話していただきました。

窪島教授の講演を聞かせてもらい、学校の先生のご苦労がよく分かりました。以前、滋賀県医師会の学校医の役員をしていました時、学校側から精神科の校医を要求されていました。その理由は学校の生徒のためでなく、むしろ先生の心の健康に必要です、と言っておられたことを思いだしました。

学会終了後の懇親会は非常に盛り上がり、今まで経験したことのないなごやかな懇親会で、肩の荷がおりました。来年和歌山でお会いできます日を楽しみにしています。

2. 一般講演座長報告

A会場

学校保健と地域連携（演題番号A-1～4）

座長　石川　哲也（神戸大学）

A-1　学校保健計画実施要領の日本学校保健史上の位置（杉浦守邦）

日本が米国の占領下にあった昭和 24 年代に、ＧＨＱの指導の下に作成された「小学校保健計画指導要領」及び「中学校保健計画指導要領」に示された、学校医、学校歯科医及び養護教諭の職務に関して評価した。

戦前の学校医が、学校衛生に関し権限を持っていたのに比して、本要領に示された、学校医の職務は、学校保健への参画であり、また、養護教諭の健康管理のうち、身体検査などが補助的な立場になったこと、保健主事の設置が強力に推進されたことなどを指摘し、学校保健の暗黒の時代の到来と評価した。

この評価は、人により分かれると考えられる。

また、本要領は、健康教育についても示しており、座長の質問に対して、健康教育については、高い評価をしていると解答した。

A-2　（発表取り消し）

A-3　養護教諭が捉える学校保健と地域保健の連携（岡本啓子他）

奈良県内の養護教諭が地域保健とどのように連携をとっているがについて自記式調査を行ったものである。小学校、中学校、高等学校とも最も多かったのは「感染症対策」であり、次いで小学校では「歯科保健」、「栄養」、「食生活」、「学校保健委員会」であった。中学校は、次いで「喫煙防止」、「精神保健」、「性教育」であった。高等学校は「薬物乱用防止」、「性教育」、「栄養・食生活」であった。

いずれも今日的な課題が上位を占めていた。座長の希望としては、環境衛生関係など広く学校保健に関してのデータが集まれば今後の方向を示す上でさらに有意義なものとなる。

A-4　養護学校における養護教諭の位置づけと連携について（林崇子）

養護学校における養護教諭の位置づけと他職種との連携についてレット症候群の生徒について事例研究である。寄宿舎で生活している当該生徒に対し寄宿舎と学校との保健記録を共有し、学校における発作の起きる場所等の点検を小児科医とともに行い、光環境などを改善することによって発作回数が減少してきたことが報告された。

このような取り組みをすることが、養護教諭に特有の重要な役割となると改めて認識できた。

養護教諭の活動（演題番号A-5～7）

座長　林　正（滋賀大学）

A-5　病弱養護学校における養護教諭の現状と課題に関する一考察（池川典子他）

特別支援教育の視点から、病弱養護学校での７年間の実践結果を分析したものである。支援が困

難な小児ガン、不登校等は告知やプライバシー、心理的アプローチに配慮した個別の検討が必要である。また関係機関との連絡、子どもの健康課題への支援に差異があるため、実態に即した方法を模索する必要があること、早期に地域の小中学校の養護教諭等とのネットワーク作りの拡大と深化の必要性が指摘された。課題解決に向けての更なる検討を期待したい。

A-6　学生の学習支援システムの構築　①適応指導教室との連携（野谷昌子他）

養護教諭養成課程の短大生に適応指導教室指導員による講習を実施した。65 名の参加学生に対して、不登校児童生徒のイメージや保健室登校等の知識や意識の質問紙調査を実施した報告である。不登校児童生徒に関しては理解が深まり、積極的に関わっていこうとする気持が伺えたとの事であった。調査人数が少ないのでもう少し蓄積した人数の検討を期待したい。

A-7　学生の学習支援システムの構築　②体験学習を通して（大川尚子他）

6 ヶ月間適応指導教室の学生指導員として、毎週 1 回 4 名が 34 回参加した。また不登校児童生徒の家庭への訪問指導員として、3 名が月 1～2 回 15 回参加した。さらに大阪府教委主催の学びんぐサポーターとして 6 名が 67 回参加し、ハートフルフレンドでは 2 名が 25 回参加して、子どもとのコミュニケーションのとり方、ふれあえる楽しさ等を体験した。家庭環境、心の動向等多方面的に体得することができ、有意義な体験学習であったとの報告である。①適応指導教室との連携の結果と②体験学習を通しての結果との関連（①②両方とも参加した学生と体験学習には参加していない学生との比較検討等）の検討に期待したい。

養護教諭と教育支援（演題番号Ａ-8～10）

北村陽英（奈良教育大学学校保健研究室）

A-8　学校内における保健室登校への支援に関する研究Ｉ（角道静枝他）

角道静枝氏ほかによる「学校内における保健室登校への支援に関する研究(1)」の発表は、不登校児童生徒の学校内での居場所として養護教諭は保健室を活用したいと思っているのに、今日においても保健室登校を快く思っていない教職員とその組織体が意外と多いいという調査報告であった。養護教諭が校内支援体制を積極的に作ることが必要であるとの意見が出された。

A-9　ADHD をもつ子どもの教育支援（西村望美他）

西村望美氏ほかによる「ADHD をもつ子どもの教育支援」の報告は、教育支援が必要な児童について 4 校の小学校において校内でどのような支援体制が組まれているかを調べたもので、校内支援体制の整備と保護者との信頼関係の構築が重要であると述べられた。

A-10　卒業おめでとうカードを用いた保健指導（松永かおり）

松永かおり氏による「『卒業おめでとうカード』を活用した保健指導」は、小学校卒業時に卒業児童に 6 年間の身長・体重の成長の記録をプレゼントした時の児童と保護者の反応を見たもので、概ね『喜ばれた』との結果であった。

B会場

肥満（演題番号 B-1～3）

座長　山本　公弘（奈良女子大学）

B-1　小学生のアレルギー疾患と肥満との関連（藤原寛他）

小学生を対象としてアンケート調査を行い、アレルギー疾患と肥満との関連について得られたデータを考察した発表である。理論的には、2 つのカテゴリーに数理的な関連性があることと、因果関係が存在することは必ずしもイコールではない。そこで、アレルゲンとなる高分子物質の消化管よりの吸収が、小学生という年齢でも高頻度に起こり得るのか、文献による生理学的な考察を加えると、より洗練された研究になると思われる。

B-2　小学校高学年児童における血清脂質と栄養摂取および身体活動量の実態調査（寺坂友美他）

会場で配布された資料では「日本人の栄養所要量」と調査対象者の実際の摂取量を比較している。栄養所要量はときどき改訂されるが「その何次のもの」か、また年齢によって異なるが「何歳のもの」か、さらに身体活動のレベルによって異なるが「どのレベルのもの」かを記述したうえで比較することにより、より説得力のある研究に発展すると思われる。

B-3　Ⅰ型糖尿病児の思春期における問題点（その 2）（川部芳子他）

昨年に続いての症例報告である。症例 2 は心理的な問題をより多く抱えており、対応が困難な状況になっている。治療者（または指導者）対患児という視点ではなく、研究者が患児になったつもりで周辺の環境を捕らえ、患児と同じ気持ちを味わってみると、解決への展望が開けるかもしれないと思われる。

なお、糖尿病の旧分類「Ⅰ型」に近いものは、現在は「1 型」と算用数字で記述する。

学校検診（演題番号 B-4～6）

座長　井上　文夫（京都教育大学）

B-4　学齢期の肥満及びインスリン抵抗性が血圧に及ぼす影響（宮井信行他）

B-5　若年者における自律神経機能と各種 G タンパク遺伝子多型との関連について（松永哲郎他）

B-6　学校検尿の取り組みについて（栗栖暢子）

生活習慣と栄養（演題番号 B-7～10）

座長　川畑　徹朗（神戸大学）

B - 7　（発表取り消し）

本セッションでは以下の 3 題が発表された。

B-8　中学生の生活習慣確立に向けて「総合的な学習」による指導の効果（第 2 報）（内海みよ子他）

本研究は、某中学校の生徒を、「総合的な学習」におけるテーマ「健康なライフスタイルを確立しよう」を履修した生徒と履修しなかった生徒に分けて、中学 1 年時と 3 年時の生活習慣状況調査

と血液検査の結果を比較し、教育の有効性を明らかにしようとしたものである。

分析の結果、就床時刻、睡眠の質、運動量等に履修の効果が認められたと結論している。ただ残念ながら、統計的な検定結果が示されていないために、解釈が主観的であるとの印象を受けた。今後の発表においては、p 値を示していただければより説得力が増すと思われるので、一考していただければと思う。

以下の 2 題は、兵庫県五色町における調査（Goshiki Health Study）結果に基づくものである。

B-9　五色町と米国 Bogalusa における 10 歳児童の栄養摂取比較（永井純子他）

本研究は、米国 Bogalusa において 1992-1994 年に 10 歳児童を対象に実施した食事調査の結果と、兵庫県五色町において 1999 年に小学 5 年生を対象に実施した食事調査の結果を比較し、日米児童の栄養摂取の特徴を明らかにしようとしたものである。

分析の結果、五色町の児童は Bogalusa の児童に比べて、総エネルギー、蛋白質、脂質の摂取量、脂質のエネルギー比が少ない一方、炭水化物のエネルギー比、コレステロールやナトリウム摂取量は高いことが示された。一方経年的に見ると、五色町の児童の脂質のエネルギー比は増加傾向にあることを示し、観察の継続の必要性を述べた。

B-10　小・中学生における学校給食実施日と休日との栄養摂取状況の比較- Goshiki Health Study-（有吉綾子他）

本研究は、1996 年から 2001 年にかけて兵庫県五色町の小学 5 年生と中学 2 年生を対象に実施した 3 日間（土～月曜日）食事調査の結果に基づいて、学校給食のある平日の食事状況と休日の食事状況を比較したものである。

分析の結果、休日は平日に比べて、栄養素では蛋白質、ビタミン、ミネラルの摂取量が少ない一方、脂質、ナトリウムの摂取量は多いことが示された。また食品では、休日は平日に比べて、乳類が少なく、砂糖／菓子類の摂取量が多かった。以上のことより、休日の食事のあり方を改善する必要性を述べた。

以上の 2 題は、五色町における長年の調査結果に基づくものであり、我が国における健康教育とりわけ食生活教育の目標を設定する上で貴重な資料となると思われる。

C 会場

健康教育（演題番号 C-1～3）

座長　宮下　和久（和歌山県立医科大学）

C-1　米国の青少年の飲酒防止プログラム Project Northland にみる地域コミュニティとの連携（森脇裕美子他）

飲酒防止プログラム　Project　Northland　が米国シカゴで 6～8 年生を対象として介入研究が行われており、予防のためのコミュニティーの形成とそのネットワークを基盤とする活動、中でもオーガナイザーの育成が中心となって住民参加型で行われる、学校とコミュニティーの共働するシス

テムの実践についての報告があった。日本社会への応用の可能性について言及があった。オーガナイザー育成およびコミュニティーサイズ等について討論が行われた。

C-2　環境問題（浮遊粒子物質）を主題にした健康教育（竹内良樹他）

大学キャンパス内で長期間にわたる、空気中 SPM を多段型ロウボリュームサンプラーにて捕集し、分析に供された。結果として、Zn イオンは、ゴム製品由来、$NO3^-$イオンは、排気ガス由来と、車が原因となっている有害物が多く含まれていた。こういった、具体的事例を健康教育に導入することによって、子どもたちのみならず家庭を巻き込んだ環境問題への気づき、健康行動へのきっかけとなることが期待されるとの発表であった。道路沿線の住居地での測定との比較、柏原キャンパスという高い地形における測定の意義等についての議論があった。

C-3　韓国と日本の小学生の健康行動の比較研究（白雲晳）

韓国でも、近年は子どもの健康をとりまく環境の変化はめざましく、子どもの体力や適応力の低下、また生活習慣病等も問題となっている。そこで、韓国京畿道富川市 6 年生と日本の大阪府下 6 年生に生活習慣に関する 20 項目のアンケートを行い、両国内の子どもたちの健康行動の状況について比較した。多くの項目では、両国同様な結果であったが、7 項目について日本が、2 項目について韓国が有意に高い結果であった。韓国では、日本のように保健科の教科書を充実させ、健康教育をより指導する必要があるとの報告であった。日本と韓国の小 6 のカリキュラムの異同についての討論があった。

学生の意識と養育態度（演題番号 C-4～7）

座長　堀内　康生（元大阪教育大学）

当日は快晴に恵まれ、琵琶湖を眼前に望む絶好の会場で開催された。発表会場は大会議室で申し分がなかった。開催された先生方のご苦労が痛感された。残念なことに参加者が少なく、発表者の意気込みが十分に受け止められなかった。

C-4　普通救命講習受講後における学生の意識調査（大道乃里江他）

健康教育に関る学生を対象に心肺蘇生の講習を実施し、前後の安全意識・危機対応能力についてのアンケート調査である。受講により蘇生法を体験した学生は安全意識が高くなり、危機に対する意識が体験のない学生に比べ高くなったとの報告である。学校を取り巻く環境は危険が増していることから、学校現場で起こる様々な危険に対応できる学生の養成に向けた発展を期待したい。

C-5　学校管理下における障害事例の分析　–1989 年から 10 年間の重度障害事例について–（長谷川ちゆ子他）

小学校から高等学校までの障害 1～7 級の事例 515 件の分析結果の報告である。男女比は 3：1 で男子に多い。校種別では年齢の進行とともに増加している。課外指導中が教科指導中より多い。障害種別では脊柱障害が圧倒的に多く、視力・眼球運動障害、醜状障害の順に多くなっている。障害事故を防止する資料として役立てるために潜在危険の理論を踏まえた整理を行い、事故原因を分析した研究への発展が期待される。

C-6　高校生の自己肯定感と規範意識にみられる保護者の養育態度について（笠井恵美他）

演者が始めに説明したように本高校は授業料減免 51%、長期欠席 24.1%の状態にある生徒の実態

報告である。自己肯定感で最も高い項目「友達がいるので学校に行くのが楽しい」が 66.9%で全国平均 91%に比べ著しく低い。「授業中にガムをかんだり、ジュースを飲んだり」「コンビニで万引きをしたり」と規範意識が低く、保護者が養育する態度も無関心が多いとの報告である。報告を聞きながらこのような実態が日本の社会にあることに驚嘆した。演者は保護者の意識を高める工夫が必要と結んでいるが行政を含めた幅広い取り組みを根気よく進めることをお願いしたい。

C-7　小学生の「偏平足」と運動習慣・不定愁訴との関連（井上文夫他）

小学校 5･6 年生を対象に足底形成と運動習慣や身体症状の関連についての調査報告である。偏平足群は足底形成群に比べ身長が低く、体重が重い、BMI が高いことに有意差が認められたと報告している。しかし、偏平足群と運動習慣や生活習慣に関連は認められづ不定愁訴の立ちくらみに有意差が認められ、肥満傾向と関連することを報告している。フロアからはフットプリントで足指の認められないケースが多いことから機能的な面からの検討も必要との意見がだされた。今後の発展が期待される。

歯科保健指導（演題番号 C-8～10）

座長　白石　龍生（大阪教育大学）

C-8　CO、GO の生徒への指導とその効果の検討（住吉由加他）

中学 3 年生の保健委員による CO、GO と判定された中学 1 年生に対する保健指導の効果を継続的に調べた報告であった。要観察歯の段階で歯の健康について学ぶ機会を持つことが、う歯への悪化を防止できることを認めたものであった。会場より、1 年後および 2 年後において介入等の強化を行っていけばより効果が高まるのではという指摘がなされた。学校歯科医および歯科衛生士の協力を得た取り組みであり、今後のさらなる発展が期待される。

C-9　児童生徒の永久歯う歯罹患状況の分析に用いる指標について（藤居正博他）

滋賀県下の過去 10 年間の永久歯う歯罹患状況結果をもとに、DMFT の減少が、う蝕を経験している者の減少によるものかあるいはう蝕経験者でのう歯保有数の減少によるものかについて学年ごとに調べた研究であった。小学校 1 年生の DMFT の大幅な減少は、う蝕経験者の減少が大きく、高校 3 年生では逆にう蝕経験者の 1 人平均う歯数の減少が大きく作用していることを明らかにした。なお小学校 6 年生および中学校 1 年生では、両者がともに関与しているという報告であった。う蝕経験者の 1 人平均う歯数も口腔保健状況を把握するための一指標となる可能性を示したもので、今後の調査研究がさらに期待される。

C-10　児童生徒の定期健康診断における要観察歯（CO）の追跡調査（木村誠他）

要観察歯（CO）が 1 年後および 2 年後にどのように推移したかを継続的に調べた研究であった。要観察歯が設定された意義を改めて認識するとともに、歯科検診の事後措置の重要性について示唆を与える発表であった。会場より継続的に調査を行う重要性について指摘がなされた。要観察歯の判定基準を含めて再検討する必要性が考えられるが、このような縦断的研究がさらに充実されることが期待される。

3. 教育講演座長報告

教育講演(1)　学校教育現場の混乱に果たす児童精神医学の役割
ー「発達障害」の問題と日米の臨床心理教育の相違を通じてー

十一　元三（京都大学医学部保健学科教授）
（Case Western Reserve 大学医学部児童精神医学部門客員講師）

座長　林　正（滋賀大学）

はじめに近年の青少年事件と児童清心医学の関わりについてふれられ、発達障害については、とりわけ広汎性発達障害の特徴を、自閉症とその軽症型と考えられるアスペルガー障害をとりあげて説明された。さらに教育現場と児童精神医学の役割として、1)教育現場で生じる問題と発達障害、2)児童精神科医の役割とカウンセラーの役割を日米の現状と比較しながら説明された。そして 3)素因と成育環境の問題にもふれ、近年の極端な風潮との関連で例示された。次に学校教育をとりまく現状の問題点として、子どもの発達の捉え方や、学校、教師が担う役割と社会の風潮、文科省の行政の求められる認識等をあげられた。最後に、我が国における児童精神医学教育の遅れを指摘され本講演をまとめられた。

パワーポイントを用いて、研究の成果をまじえながらの説明には説得力があり、わかりやすく大変勉強になったように思う。

参考文献

1)　十一元三：発達障害と脳、心の科学、100 号；日本評論社、No.100/11、79-87、2001
2)　十一元三：自閉症の治療、療育研究最前線、最近のアメリカにおける自閉症療育の動向、育ちの科学、日本評論社、No.1/10、17-26、2003

教育講演(2)　今日の学校状況と教師に対する相談・支援のあり方
ー「教師支援・相談室」の活動に関連してー

窪島　務（滋賀大学教育学部付属教育実践総合センター）

座長　石樽　清司（滋賀大学）

まず、滋賀大学教育学部附属教育実践総合センターの概要、そしてセンターで行われている教育・研究体制についての紹介があり、演者が所属されている教育臨床研究部門での教育相談活動についてご説明がありました。ここでの教育相談は、LD（学習障害）を持つ子供についての教育相談のほか、教師の悩みについての相談も行っており、本学会ではそこでの相談内容をもとに、今日の学校現場における教師の現状と教師支援の活動についてお話しをしていただきました。

教師の悩みごとに関しての相談には 3 つのタイプがあり、1 つは教育指導実践上の悩み、2 つめは教師としての能力や将来についての悩み、3 つめは問題教師の周辺から寄せられる相談で、3 つめの相談では、教師自身は特に困っていない、悩んでいないということが問題であるとのことでありました。

教師の悩みについての相談を始めたころは、子どもの問題行動に端を発する学級崩壊にまつわる

相談が多くみられ、最近では勤務時間中に飲酒をする教師（アルコール中毒）に関しての相談もあったが、これらを含めて、教師の悩み相談から浮かび上がる教師には次のような特徴がみられるとのことでした。すなわち、子どもとのコミュニケーションがとれないことから、子どもが分からないという感情があること、授業の不成立やコミュニケーションがとれないというような悩みごとをどこでどのように相談をしたらよいかが分からないとか、分かっていても相談に出向かないとか、コミュニケーションがとれないことの問題に教師自身が気がついていない、というような特徴がみられるようです。また、教師にも「軽度の発達障害」が見られる場合もあり、これが原因で先生同士のトラブルが生じていることもあるとのことです。こうしたことは、教師の孤立感を高めたり、教師自身の問題解決能力を破綻させ、また、「無能力教員」というレッテルが張られるのを恐れるあまり、神経症を発症させたりするような事態を招いているようです。

演者は、こうした教師の悩みを解決するには、教師支援システムの構築を図る必要があり、それには、教師問題を教師の個人的問題にしないで、今日の社会的問題、学校全体の問題として捉え、子どもと教師の人格的発達の保障システム、すなわち本来の教育的価値実現をめざす「教育共同体」を実現すると同時に、科学的で公平な、そして、権力の介入がなく、生活が保障された相談と治療および再学習（研修）システムを構築することが必要であろうと考えられています。また、この支援システムでは、地域社会が問題教師を監視するような支援システムでなく、学校全体を支援するようなシステムを構築することが、今日の教師支援を考えるうえでは必要ではないであろうかと提案されています。

この教育講演では、約１時間にわたって教師側の問題についてお話しをいただき、我々学会員は今日の教師の悩みについて理解を深めることができました。講演いただきました窪島先生に感謝を申し上げます。

4. 学会長講演座長報告

「慢性疾患を持つ児童の学校での管理」の座長を務めて

藤居　正博（滋賀県歯科医師会）

本学会の学会長は滋賀医科大学　看護学科　大矢　紀昭教授が第 45 回の学会に続き滋賀県での2回目の学会長を務められた。

学校管理化の児童生徒の死亡は年間 200~250 人あり、その半数が突然死といわれ対策は講じられているが効果は余りあがっていない。これら、突然死や慢性疾患を有する子供の原疾患増悪を予防する対策について講演された。

学校保健では保健室の果たす役割は大きく、保健室の状況の調査結果では養護教諭は殆んどが 1 名の勤務で、近年、保健室に来る児童生徒の増加傾向に伴い研修等で学校を空けることが出来ず、勤務に余裕のない養護教諭の実態がうかがえる。保健室には包帯、ガーゼ、外用消毒薬等は備えられているが内服薬は少なかった。又、救急車で病院へ転送した経験のある学校が 40%を上回り緊急時の対応も多く認められる。

心疾患は突然死の最大の原因であり、学年が進むにつれ占める割合が多くなる、またてんかんは学校に診断書が提出されていないことも多く、学校での痙攣発作時に対応に困ることも多い、それら以外の疾患も含め家庭と学校は当然であるが、医療機関もそれぞれの子供の疾患に応じた適切な対応をとるため連携を密にする必要があるが、上級学校に進学の際に連携が十分でなくなるケースもあり改善が必要との報告であった。30 分というたいへん短い時間の講演ではあったが要点を述べられ、学校保健の課題と改善点を指摘いただいた。

5. 学会印象記

宮井　信行（和歌山県立医科大学）

この学会は例年、梅雨の季節に開催されることもあって、ここ数年は雨が多かったように記憶していますが、今年は、時折強い日差しが照りつけるほどの好天に恵まれました。そんななか、私はJR 膳所駅から徒歩で学会場まで向かいました。行列に倣って歩くうちに、途中で人の列が少なくなり、一抹の不安を抱きながらもさらに歩いておりました。案の上、見当違いの方向に進んでしまい、多少の遠回りはしましたが、何とか開会直前には会場に到着することができました。会場となったピアザ淡海は、琵琶湖の美しい景観を眼下に眺める素晴らしい立地にあり、建物内も落ち着いた雰囲気で、学会場としても利用しやすいという印象を受けました。

午前中は 3 会場に分かれて、29 題の一般研究発表が行われました。学校現場での養護教諭の役割と課題、不登校や ADHD などの問題を抱える子どもへの支援、小児の生活習慣病に関する基礎研究や疫学調査の報告など、多彩な発表が行われました。例年に比べると、些か演題数が少ないような気がしましたが、そのためか各会場でのセクションの割り振りにもご苦労された様子が窺われました。私は自分の発表があったこともあり、主に B 会場で発表を聞かせて頂きました。私の演題にも多くの質問をいただきましたが、他のほとんどの発表にも的確な意見や質問がなされ、活発な討議が行われていたように感じられました。特に、私自身にとっては、「若年者の G-protein 遺伝子多型と自律神経機能との関連について」の報告が刺激的で印象に残りました。遺伝子多型と疾病リスクの研究は、分子疫学という新しい領域が確立するほど、今やトピックとなっていますが、遺伝子解析の研究成果が学校保健学会でも報告されるようになったことの新鮮さもあって、とても興味深く拝聴しました。フロアーからは、このような遺伝子解析から得られた知見が、学校教育という枠組みのなかの保健活動にどのような形で生かされるのかという質問がなされました。分子疫学の狙いの一つは、同じ環境因子に曝されたときに、疾病を発症するか否かを決定する、いわゆる個人の感受性に関する遺伝子情報を把握することで、従来よりも効果的なハイリスク・ストラテジーを行うことにあります。予防医学にこのような遺伝子解析の手法が持ち込まれるようになるには、倫理的な問題も含めて、解決すべき課題がまだまだ残されているように思いますが、とりわけ、小児期における肥満やそれに伴う代謝性疾患の発症には、環境的な要素だけでなく、個々の持つ疾病リスクに対する遺伝的な素因も強く関与していると考えられます。このような視点に立った研究は、遺伝子解析に限らず幅広くなされてきておりますが、学校保健の実践に生かせる形での今後の研究の発展が期待されるところです。

ところで、私がこの学会に初めて参加させて頂いたのはもう 15 年近くも前のことになります。当時に比べると、最近、学会の参加者が少なくなってきたように感じます。この点については、評議員会のなかでも取り上げられて議論がなされました。学校保健に関わる研究者はもとより、教育現場の総括者である学校長、実践に携わる保健主事や一般教員、学校保健行政の関係者などが数多く集い、様々な議論をしていくことは、現場での学校保健活動を有機的に進めていくために不可欠ではないかと思われます。さらに、教育学部の保健や養護課程、あるいは看護系の学生や院生などが学会に積極的に参加することも大切なことと思われます。学校保健に関わる諸問題の新しい知見を学ぶことや、現場で子どもと対峙して保健活動の実践に携わっておられる養護教諭の話を聞く機

会を得ることはとても有意義なことですし、学会の雰囲気に触れることで、科学的な視点で物事を捉える姿勢や態度を養うことにもなるのではないかと考えます。

当日は、所用のため午後から大学に戻りましたので、午前中のプログラムでの話題を中心に印象記を書かせて頂きました。最後になりましたが、今学会を円滑に運営して頂いた学会長をはじめ、事務局のスタッフの方々に感謝申し上げます。

永井　純子（兵庫教育大学）

夏服に衣替えしたばかりの高校生、梅雨入り間近の紫陽花に初夏の訪れを感じながら早朝の膳所駅を後に地図を片手に歩いていると、急に視界が広がり雄大な琵琶湖の姿が目に飛び込んできました。

会場となったピアザ淡海は琵琶湖に面した素晴らしい景観を持つホテルで、受付は 3 階の大会議室前で 9 時から始まり、今年も多くの先生方が参加されました。9 時 30 分からは一般演題の発表が始まり、A 会場では学校保健と地域連携、養護教諭の活動、養護教諭と教育支援が、B 会場では肥満、学校検診、生活習慣病と栄養が、そして C 会場では健康教育、学生の意識と養育態度、歯科保健指導をテーマに発表が行われました。私は B 会場で発表させて頂いたのですが、一番目の演題が中止となり、後に続いた私達の発表・討論時間に十分時間をかけて頂いたようでした。昼食をとりながらの評議委員会では幹事長の石川哲也先生と前学会長の北村陽英先生により議事が進行されました。総会では次期学会長に就任された和歌山大学保健管理センターの宮西照雄先生の力強いご挨拶に早くも次期学会への期待が膨らみました。

総会の後、大会議場で行われた学会長講演、教育講演は大変興味深く拝聴させていただきました。滋賀医科大学の大矢紀昭先生の御講演では、多忙な養護教諭の現状および保健室の薬品の常備が極端に少ないことなどが明らかにされ、幼い命を守る養護教諭の仕事の重要性と学校管理化における事故、疾病予防の問題点を改めて認識することができました。続いて行われた京都大学の十一元三先生の御講演は今でもとても印象に残っています。混迷する学校教育現場に対して児童精神医学の立場からその役割を明確に提示されるとともに、「発達障害」の問題と日米の臨床心理教育の違いを明らかにされました。近年、少年事件が相次いで報道され、凶悪化する青少年というイメージがマスメディアによって広められていますが、事実を正確に把握し、児童と児童を取り巻く環境（家庭・学校・社会）の問題を明確にするとともに、「発達障害」という視点からのアプローチについても研究を進めていく必要性を認識することができました。最後に行われた滋賀大学の窪島務先生は今日の学校の状況と教師に対する相談・支援のあり方について御講演されました。マスメディアでは「荒れる学校」、「学級崩壊」などの言葉で青少年のわかりにくさが表現されていますが、教師の授業不成立、子どもとのコミュニケーション不成立等、教育実践上の悩みを抱えて奮戦している教師の姿が伝わってきました。また、最後に会場を移して行われた懇親会では夜の琵琶湖を一望しながら、大きな舟盛り料理に舌鼓を打ち、紅潮した先生方の熱い教育談義に新たなエネルギーを頂きました。今回、またこれまでに学会でご尽力下さいました先生方・スタッフの皆様、素晴らしい学会を本当にありがとうございました。心から厚くお礼申し上げます。

藤原　寛（平安女学院短期大学）

湖国大津市にて開催された第 51 回近畿学校保健学会に参加した感想とともに、私見や本学会への要望も加えてまとめてみました。まず、本学会は学校保健研究の発展のために有益な情報が交換できる学術的研究とともに、若手の研究者にとって、大学の卒論発表の次に発表の機会が得られる友好的かつ教育的な雰囲気を漂わす学会と考えております。発表時に指導された教官が最後の助け舟？を出すことも多く、発表者から伝わる緊張感が和らいでホッとすることもしばしばです。しかし、過去数年間を振り返ってみて、若手の研究者が継続して発表されることはあまりありません。研究の継続や発展という観点からは、貴重なデータを埋もれさせないことは大切ですが、発表者に研究の方向性等を示唆する助言を通して、研究者としての芽を摘むことなく、意欲的な研究者を育むことも学会の発展という観点からは重要なことと考えています。学会の規模から若手研究者のセッションを設けるというのではなく、学校現場の今日的な問題とともに現役学生の研究内容等の情報を参考にし、会員や学生のニーズに応えた質の高い講演や演題を提供することも学会を盛り上げる方策になると考えます。

一般演題では、養護教諭の教育活動や教育支援では多数の会員が熱心な討議が交わされていました。他の会場での参加者は疎らでしたが、生活習慣や肥満関連研究など小児肥満に携わる筆者にとっては興味深い内容が多く、今後の研究成果も大いに期待できる発表でした。筆者も発表する機会を得ましたが、会場におられた数名の会員の方だけでは十分な討議も出来ず、立派な会場をご準備くださったスタッフの方々に申し訳なく思っています。今後、各研究分野の発信源となる本学会に相応しい研究を通して、新しい知見や指針が構築できるよう、日頃の研鑽に努めたいと思っております。

会長講演では、筆者自身が数年前に本学会で発表した心疾患児の管理指導における今日的な課題を鋭角的に指摘され、日常の煩雑な公務に託けて放置したままの研究課題が違った視点から考察できる内容を示唆していただき、新しい研究への手がかりとなりました。また、学校現場で最重要課題の一つである発達障害に関して、小児精神医学の観点から論理的・体系学的な内容とともに実践的な話題を含めた特別講演を拝聴できたことは大きな収穫でした。明解な講演を通して、常々、言いたいことがうまく説明できず、もどかしく思っていた多くの事例について整理をつけながら聞き入っておりました。

本学会は他の学会に追従するより、独自な方向性を発揮することに意義があると懇親会で力説された諸先輩の永年のご尽力を継承するためにも、夕日が沈む比良八荒を遠く眺めながら、新たなる研究意欲を湧き上がらせておりました。

末筆ながら、本学会の開催にご尽力賜りました大矢紀昭先生はじめ多くのスタッフの先生方に深謝申し上げます。

（資料）

平成16年度近畿学校保健学会評議員会・総会報告

日時　平成16年6月5日（土曜日）　12：00～14：00

場所　評議員会　ピアザ淡海　305号室（12：05～13：00）

　　総会　　ピアザ淡海　大会議室（13：15～14：00）

議題

1　平成15年度会務報告

2　平成15年度決算報告

3　会計監査報告

4　平成16年度予算

5　名誉会員の推薦

6　次期学会開催地及び会長

　開催地：和歌山県

　年次学会長：宮西照生（和歌山大学保健管理センター長）

7　近畿学校保健学会50周年記念事業

　事業報告

　決算報告

8　その他

平成14年度近畿学校保健学会会務報告

1. 会員数　335名（名誉会員13名を含む）：平成16年4月1日現在
2. 会議開催，学会通信など

平成15年 4月26日　第1回幹事会開催（於：奈良教育大学）
平成15年 5月23日　近畿学校保健学会通信No.105発行
平成15年 6月28日　第50回近畿学校保健学会年次学会開催
（学会長　北村陽英）（於：奈良教育大学）
平成15年 6月28日　第2回幹事会開催（於：奈良教育大学）
平成15年 6月28日　評議員会及び総会開催（於：奈良教育大学）
平成15年 8月31日　近畿学校保健学会通信No.106発行
平成15年10月10日　近畿学校保健学会50周年記念誌発行
平成15年11月 3日　近畿学校保健学会 50 周年記念パネルディスカッション開催
（於：神戸国際会議場）
平成15年12月13日　第3回幹事会開催
平成16年 1月28日　近畿学校保健学会通信No.107発行
平成16年 2月21日　第4回幹事会開催（於：大阪教育大学）

近畿学校保健学会平成15年度決算

平成16年3月31日現在

【収入】

	予算額	決算額	予算額－決算額	摘要
会費収入	1,050,000	798,000	252,000	3,000×266人
雑収入	5,000	450,167	△445,167	50周年記念基金残
前年度繰越金	807,775	807,775	0	
合計	1,862,775	2,055,942	△193,167	

【支出】

印刷費	500,000	212,205	287,795	学会通信(No.104-107)等
郵送費	250,000	199,960	50,040	
事務費	100,000	108,644	△8,644	
人件費	100,000	97,000	3,000	
会議費	30,000	18,118	11,882	
交通費	20,000	4,310	15,690	
学会補助費	200,000	250,000	△50,000	
予備費	662,775	58,000	604,775	奈良へ新会員29名分
次年度繰越金		1,107,705	△1,107,705	
合計	1,862,775	2,055,942	△193,167	

上記の収支決算書に相違ないことを確認しました。

平成16年4月17日

監事　角道静枝

監事　永井純子

近畿学校保健学会平成16年度予算

【収入】

	予算額	摘要
会費収入	957,000	3000×319人
雑収入	5,000	利子，寄付金等
前年度繰越金	1,107,705	
合計	2,069,705	

【支出】

印刷費	400,000	学会通信（3回）等
郵送費	250,000	
事務費	100,000	
人件費	100,000	
会議費	30,000	
交通費	20,000	
学会補助金	250,000	和歌山県へ支出
役員選挙	60,000	
電子媒体化費用	400,000	ホームページ作成を含む
予備費	459,705	
合計	2,069,705	

近畿学校保健学会会員数

平成16年4月1日現在

所属	名誉会員	評議員	一般会員	計
滋賀県	2	26	10	38
京都府	4	22	13	39
大阪府	4	61	53	118
兵庫県	0	42	16	58
奈良県	4	29	13	46
和歌山県	2	23	10	35
他府県	0	0	1	1
計	16	203	116	335

名誉会員（平成16年6月5日現在）

年	氏　名	所　属	年	氏　名	所　属
昭和58年	川畑愛義	京都	平成12年	上林久雄	大阪
	黒田健雄	和歌山	平成14年	杉浦守邦	京都
平成2年	安藤格	大阪	平成14年	玉井太郎	大阪
平成5年	笠松勇次	和歌山	平成15年	後藤英二	大阪
平成6年	北村李軒	京都	平成15年	竹田斌郎	奈良
平成6年	橘重美	奈良	平成15年	南條徹	滋賀
平成6年	中牟田正幸	奈良	平成16年	上延富久治	大阪
平成8年	植村良雄	滋賀	平成16年	大山良徳	大阪
平成8年	米田幸雄	京都	平成16年	美崎教正	兵庫
平成10年	出口庄佑	奈良			

近畿学校保健学会50周年記念事業決算報告

収入

		備　考
５０周年記念基金および記念誌追加	2,022,000	基金納入244名，追加記念誌186冊
利子	136	
計	2,022,136	

支出

概　　要		備　考
記念誌印刷代（600部）	1,000,220	
会議費	59,062	
郵送費	176,050	
事務費	109,592	
ポスター作成費	163,170	
記念誌編集代	36,795	
学会事務局へ送金	450,167	
振替手数料	27,080	
計	2,022,136	

平成 16 年 4 月 17 日

監事 角道静枝 印

監事　　印

平成16年、17年度幹事及び評議員（▲は幹事）

平成16年6月5日現在

滋賀県

石博　清司	滋賀大学教育学部
▲板持　紘子	滋賀大学教育学部附属中学校
伊藤　路子	長浜市立神照小学校
伊吹　良恵	大津市医師会
岩崎　信子	滋賀県教育委員会保健体育課
▲大矢　紀昭	滋賀医科大学看護学講座
隠岐　錫彦	滋賀県薬剤師会
川崎千佳子	滋賀県立高島高等学校
川端　典子	野洲町立三上小学校
木戸　増子	滋賀県スポーツ振興事業団
木村　誠	滋賀県歯科医師会
草野　薫子	元大津市教育委員会学校保健課
小島鉦一郎	滋賀県薬剤師会
小西　眞	滋賀県医師会学校医部
志村　美好	大津市立堅田小学校
立石　博之	立石診療所
▲谷川　尚己	草津市教育委員会保健体育課
田附　孝子	彦根市立彦根中学校
中村　清美	
西島　治子	滋賀医科大学看護学講座
▲林　正	滋賀大学名誉教授
播磨谷澄子	大津市立仰木小学校
藤居　正博	滋賀県歯科医師会
藤澤　晟一	藤澤医院
間壁　恵子	安土町立安土中学校
水野由美子	守山市立小津小学校

京都府

油谷　桂朗	京都府医師会
▲井上　文夫	京都教育大学体育科
岩田　明	京都府歯科医師会
大山　肇	京都外国語大学
奥村　裕	京都府学校薬剤師会
▲金井　秀子	京都文教短期大学
栗山千代美	京都市立宕陰中学校
小島　廣政	京都産業大学
小西　博喜	近畿福祉大学
澤山美佐枝	京都教育大学附属高校
白木　文代	日本スポーツ振興センター京都府支部
忠井　俊明	立命館大学
津田　謹輔	京都大学人間・環境学研究科
▲寺田　光世	京都教育大学
畑佐　泰子	大阪成蹊大学芸術学部
平野登志子	華頂短期大学
藤原　寛	京都府立大学医学部
松浦　賢長	福岡県立大学
松原　周信	京都府立大学
三浦　正行	立命館大学
水上みさ子	京都大学医学部附属病院
▲八木　保	京都大学名誉教授

大阪府

東　真美	大阪教育大学
▲一色　玄	大阪市厚生療育センター
稲田　浩	大阪市立大学医学部
上野奈初美	大阪成蹊短期大学
鵜飼　大策	大阪府歯科医師会
江原　悦子	大阪教育大学付属池田小学校
大道乃里江	大阪教育大学
岡崎　延之	元大阪女子短期大学
小川　善雄	大阪府薬剤師会
小河　弘之	大阪教育大学
角道　静枝	大阪市立阪南中学校
笠村　俊哉	武庫川女子大学
木村　龍雄	大阪教育大学
木村　未夏	大阪教育大学
楠本久美子	四天王寺国際仏教大学短大部
肥塚　正宏	大阪府医師会学校医部会
古角　好美	大阪市立桃陽小学校
小島　美幸	大阪市立長居小学校
小西　俊子	大阪市立東井高野小学校
▲小山　健蔵	大阪教育大学
▲後藤　章	大阪教育大学
▲後和　美朝	大阪国際大学
佐伯　洋子	大阪明浄女子短期大学
坂本　吉正	元大阪市立大学
更家　充	関西女子短期大学
▲白石　龍生	大阪教育大学
陶山　勝彦	大阪府医師会学校医部会
▲須藤　勝見	大阪教育大学名誉教授
高折　和男	大阪教育大学
竹中　恒夫	大阪府医師会学校医部会
辻　立世	鈴鹿国際大学短期大学部
出口　和邦	大阪府高等学校歯科医会
徳山美智子	大阪女子短期大学
中神　勝	京都ノートルダム女子大学
中川　八重	常磐会短期大学
新平　鎮博	大阪市立大学大学院
西牧　謙吾	国立特殊教育総合研究所
西村　民生	修成建設専門学校
浜　千賀子	大阪市立東商業高校
福本　絹子	元大阪成蹊女子短期大学
藤本　正三	大阪府医師会学校医部会
藤森　弘	保養・養生学研究所
古田　敬子	大阪女子短期大学
堀内　康生	元大阪教育大学
松岡　弘	大阪教育大学名誉教授
松嶋　紀子	大阪教育大学
松永かおり	大阪市立勝山小学校
光藤　雅康	大阪教育大学
美馬　信	大阪女子短期大学
元村　直靖	大阪教育大学
森内　徹	大阪市学校歯科医会
森川　英子	大阪府立河南高等学校
柳井　勉	関西科学福祉大学
山名　康子	大阪市立中野小学校
山野　恒一	大阪市立大学医学部
山本　暎子	関西女子短期大学
▲山本　信弘	大阪教育大学
吉岡　隆之	神戸市看護大学
吉田　熙延	心斎橋健康クラブ飯島クリニック

兵庫県

荒木　勉　兵庫教育大学生活健康系講座
五十嵐裕子　神戸大学発達科学部附属明石中学校
▲石川　哲也　神戸大学発達科学部
井谷　恵子　京都教育大学
今井佳代子　兵庫県立大学附属高等学校
大江米次郎　大阪樟蔭女子短期大学
▲大橋　郁代　元西宮市教育委員会学校保健課
大平　曜子　兵庫大学健康科学部
岡田　由香　神戸大学発達科学部
勝木　洋子　兵庫県立大学環境人間学部
▲勝野　眞吾　兵庫教育大学生活健康系講座
釜谷　仁士　兵庫県立上郡高等学校
▲川畑　徹朗　神戸大学発達科学部
北口　和英　西宮市教育委員会学校教育部
北村　庄衛　兵庫県学校薬剤師会
近藤　文子　兵庫大学健康科学部
蟹峨山文子　龍野市立龍野西中学校
桜井　久恵　兵庫県立伊丹北高校
下村　尚英　神戸女子大学
高橋　洋子　やまびこの郷
田中　洋一　神戸大学発達科学部
出井　梨枝　園田学園女子大学
中井　久純　神戸国際大学
永井　純子　兵庫教育大学生活健康系講座
名村　智子　姫路東高等学校
西尾　久英　神戸大学医学部公衆衛生学教室
▲西岡　伸紀　兵庫教育大学生活健康系講座
西村　宏英　武庫川女子大学附属中・高等学校
長谷川ちゆ子　淡川短期大学
藤井英恵子　神戸大学発達科学部附属明石小学校
藤田　大輔　神戸大学発達科部
南　哲　関西福祉科学大学
三野　耕　兵庫教育大学生活健康系講座
村尾　由子　上郡町立梨ケ原小学校
山名　康雄
山根　允子　淡川短期大学
山平英代子　兵庫県立加古川西高等学校
山本　博信　県立相生高等学校
▲横尾　能鉱　神戸大学名誉教授
吉本佐雅子　鳴門教育大学学校保健学

奈良県

▲有山　雄基　奈良県医師会
磯田　宏子　大阪府立八尾養護学校
大手　信重　奈良県医師会
柿内　順子　奈良市立三笠中学校
川井健二郎　奈良市歯科医師会
▲北村　昭英　奈良教育大学学校保健研究室
北村　勉男　奈良県学校薬剤師会
北山勘解由　奈良県医師会
児玉なつ子　香芝市立旭が丘小学校
小林　久幸　帝塚山大学
岩田　健男　白鳳女子短期大学
高村久英子　奈良市育和小学校
谷掛　駿介　奈良市学校医会
辻井　啓之　奈良教育大学保健管理センター
中島　充　奈良医科大学小児科
中谷　昭　奈良教育大学
西信　元嗣　奈良医科大学名誉教授
西村　敬子
浜口　遼子　奈良市学校薬剤師部会
福島英登里　奈良市立二名小学校
村井　洋子　生駒市立鹿ノ台小学校
森井　博之　天理大学体育学部
守田　幸英　奈良県教育委員会保健体育課
森田　幾代　奈良県吉野郡下市町立下市中学校
八木　哲　奈良県医師会学校医部会
柳生　晋彦　奈良県吉野保健所
安田　忠男　奈良県薬剤師会
▲山本　公弘　奈良女子大学名誉教授
吉岡　章　奈良県立医科大学小児科学教室

和歌山県

有田　幹雄　和歌山県立医科大学保健看護学部
猪尾　和弘　和歌山市成人病センター
稲田　武彦　和歌山市医師会
加藤　弘　和歌山大学教育学部保健体育
北山　敏和　和歌山県教育庁スポーツ健康課
木下　裕　和歌山県医師会
黒田　基嗣　和歌山県福祉保健部健康局医務課
左海　伸夫　医療法人スミヤ　角谷整形外科病院
坂口　弘一　和歌山市学校医会
▲武田真太郎　和歌山県立医科大学名誉教授
田中　章二　和歌山県立和歌山北高校
虎谷　良雄　和歌山県医師会
中村　靖男　和歌山県医師会
松岡　勇二　関西鍼灸大学
松本　健治　鳥取大学教育学部
南　良和　和歌山県教育庁スポーツ健康課
宮井　信行　和歌山県立医科大学衛生学教室
▲宮下　和久　和歌山県立医科大学衛生学教室
▲宮西　照夫　和歌山大学保健管理センター
本山　貢　和歌山大学教育学部
▲森岡　郁晴　和歌山県立医科大学保健看護学部
山中　守　和歌山県医師会学校保健担当
山本　博一　和歌山県立医科大学衛生学教室

50年間の発表抄録すべてがインターネットを通じて検索可能に

神戸大学名誉教授　横 尾 能 範

先の評議員会で了承されました「本学会 50 年分の全発表抄録」がインターネットを通じて検索可能になりました。これは、本学会 50 周年記念事業において、会員諸氏の経済的精神的支援と、記念事業委員会の大きなご努力によって、学会 50 年間の総括「50 周年記念誌」が発行され、また「記念講演」などの行事を終えましたが、なお多くの寄付が寄せられたのを機に提案をさせていただき、幹事長をはじめ会員皆さんの理解があって実現したものです。このような学会単位の全発表資料の情報検索や公開は、学校保健分野では勿論のこと、他分野の学会でも初めての試みとして、会員一同全国に誇れるでしょう。

以上について今秋、新潟で予定されている全国学会で発表を予定していますがそれに先立ち、その要約と具体的な検索方法についてご紹介させていただきます。

A) 電子化の対象と形式

講演集の電子化では、抄録集をその目次部分と各人の発表抄録の部分に大別し、目次部分からは演題毎に「演題名と発表者の所属氏名」を読み込み、それを文字認識させてキーワード検索の対象としました。一方、発表抄録の部分は、演題ごとに写真画像のような PDF ファイルとして収録し、検索の対象の「演題名・著者および所属先」と連結させました。これによって、過去に発表された 2000 題に及ぶ抄録の演題が情報検索でき、その目次を通じて、発表された文献内容を即座に手に入れることが出来るようになりました。

B) 設計の基本方針

過去 50 年間の記録全てを電子化して条件検索可能にするにあたって、検索の単位・検索対象・検索範囲の費用対効果も考慮しながら検討した結果、先に述べたように各自のパソコンから入力するキーワードによって検索が及ぶ範囲を「発表タイトルと著者の氏名・所属」に限定しました。この一次検索により「演題と著者の氏名・所属」の一覧を示し、表示された一覧を手がかりに、その詳細内容を二次検索するかどうかの判断を仰ぐ二段階方式にしました。この方式は丁度 10 年前、近畿各府県の養護教諭研究会の代表者らと行った「学校災害事例のデータベース化とその情報検索システム」の際に検討し、本学会に発表した方式で今回、それをインターネット上で実現したことになります。

C) 具体的な検索方法

2004 年 8 月現在、システムの骨組みが出来上がったところですが、次のホームページを呼び出してください。今後はメニューの一部としてこの「近畿学区保健学会抄録検索システム」を載せるなどして整備する予定ですが、とりあえず過去資料の情報検索方法について述べたいと思います。

http://home.kobe-u.com/kinki-sha/　　または　　http://tell-n.homeip.net/doc

を開いてください。学会開催年、府県名、会長、などの一覧が表示されると思いますが、そのページの上部の黄色い帯上の BOX の中に、キーワードを打ち込んでください。例えば、"学校事故"とか "学校災害"と打ち込み、検索ボタンを押すと、その文字列を含む演題や発表者の研究題目だけが表示されると思います。検索文字列にご"自分のお名前"も入れてみてください。

そのようにして検索された青い字の行を W-クリックすると、更に奥に進み、最終的にはアクロバットリーダの助けにより抄録の表示や印刷ができます。前後の頁への移動はネットサーフィンと同様です。上手く行ったら複合検索も可能ですから、いろんなキーワードや人名を"半角スペース"で区切って検索し、ご感想や改良点について、ご意見をお寄せいただきたいと思います。　(2004/08/23)

平成16年度第2回近畿学校保健学会学校保健学会幹事会議事録

日時　平成16年5月22日（土）　14：00～16：00
場所　滋賀大学教育学部附属中学校
出席：　石川哲也、井上文夫、板持紘子、大橋郁代、大矢紀昭、勝野眞吾、金子秀子、北村陽英、後藤章、小山健蔵、後和美朝、白石龍生、須藤勝見、武田眞太郎、寺田光世、西岡伸紀、林正、宮西照夫、森岡郁晴、八木保、山本公弘、山本信弘

【議題】

1　近畿学校保健学会平成16年度及び平成17年度幹事選挙結果について

石川幹事長から、横尾選挙管理委員長からの提出書類をもとに、平成16年度及び17年度幹事選挙結果について報告された。次いで横尾選挙管理委員長から、今回の平成16年度及び17年度幹事選挙結果において、京都府選挙投票がやり直しにより再度行われたことに関して、説明が行われた。また、この件に関して石川幹事長から京都府の評議員名簿に関して追加説明が行われた。質疑の後、団体選出の評議員の取扱いについては別に審議することとされ、選挙結果原案が挙手による採決により承認された。

2　第52回近畿学校保健学会年次学会について

第52回近畿学校保健学会学校保健学会は、7月30日（土曜日）、ダイワロイネット・ホテル（仮称、来年の5月に和歌山城の前にオープンするホテル）で開催することを年次学会長である和歌山大学保健センター長宮西照夫教授から報告され、了承された。

3　名誉会員の選出について

大山良徳（大阪大学名誉教授）、美崎教正（神戸大学名誉教授）、上延富久治（大阪教育大学名誉教授）の3名の推薦があり、経歴等の審議の結果満場一致で幹事会として承認した。

4　評議員会及び総会資料について

平成15年度会務報告、平成15年度決算報告、会計監査報告、平成16年度予算案が審議され、承認された。

5　評議員の選出方法について

団体選出の評議員について議論が行われ、団体選出の評議員についても、学会規約に則って対処することとされた。また、学会事務所と各府県の代表幹事との間の連携に取っていくことが大切であることが確認された。

6　会員名簿の取扱いについて

現在作成中の近畿学校保健学会学校保健学会ホームページにおいて、会員名、所属について掲載することについて、プライバシーの問題などについて議論され、掲載することで承認された。なお、本案件は総会に置いても承認を得ることとした。

7　その他

現在作成中のホームページについて内容の紹介が、横尾能範先生より紹介があった。

8　平成16年度及び平成17年度幹事長選出（新幹事のみ）

平成16・17年度幹事長選出が行われ、立候補者はなく、石川哲也現幹事長が推薦され、信認投票の結果、信認20票、不信任1票、白票1票で、幹事長に選任された。

（勝野眞吾幹事記録）